



第 1 2 号
平成 26 年 10 月 31 日
岩手県長寿社会課

子どもたちも、街のりっぱなサポーター！
「孫世代のための認知症講座」パート①
(岩手町立川口小学校)の巻

今回は、小中学生を対象とした認知症サポーター養成講座「孫世代のための認知症講座」について特集します。この講座は、スタートして今年で6年目になりました。

パート1では、小学生が認知症についての正しい知識を持ち、自分の祖父母や近所の高齢者への思いやりやいたわりの心を育むことを目的に講座を実施している岩手町立川口小学校におじゃましました。

I 岩手町立川口小学校の「認知症ってなあーに？」孫世代のための認知症講座

川口小学校を目指す



岩手町立川口小学校は、岩手町に8つある小学校のうちの1つで児童総数は174名です。かの宝塚歌劇団で活躍した女優、園井恵子さんが卒業した学校でもあります。

さて、6月6日（金）なんでも取材班は雲の多い空と岩手山を横に見ながらの3校時目の総合授業を目指し、国道4号線を一気に北上。川口に入り右折すると、中学校や保育所が集まる広大なスペースにランドマークの校舎が見えてきました。



川口小学校と「孫世代のための認知症講座」

川口小学校では、3世代・4世代が同居する家族構成の児童が多く、また、学校の近くに老人保健施設もあり、家庭でも地域でもお年寄りとふれ合う機会が多いことから、この講座を平成22年度以降、継続して授業に取り入れています。

主に、小学校4年生を対象としており、受講者数は今回で通算100人を突破しました。

会場に児童が集まってスタンバイ

まず、担任の佐藤先生が、岩手町地域包括支援センターの道ノ下主任保健師と畠山主任保健師を紹介して講座が始まりました。

孫世代のための認知症講座

「認知症ってなあーに」
(10時35分～11時15分)
音楽室にて

- ・やや背中に緊張感

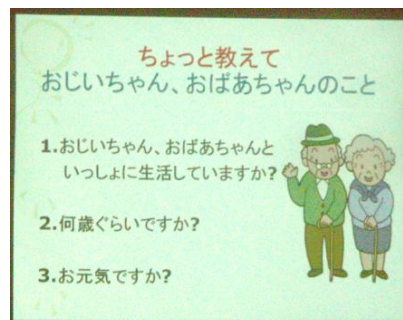


講座の風景をダイジェストで紹介します

講座は、以下の構成となっており、講師と児童の対話型で進行されました。

- ・児童に身近なお年寄りのことを想像してもらう
- ・人間のライフサイクルと身体的変化
- ・認知症とは（その病態と症状）
- ・認知症サポーターとして、ぼくたち・わたしたちに、今、できること

はじめに、「身近なお年寄りを想像してもらう」ために、「ちょっと教えておじいちゃん、おばあちゃんのこと」というスライドで3つの質問が児童たちに出されました。



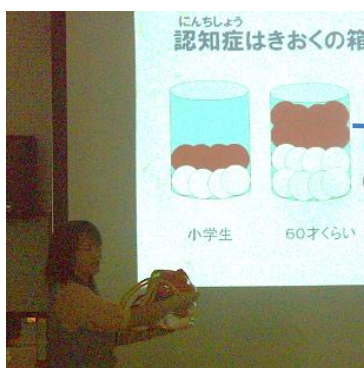
「おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らしているひとは、手をあげてくださいーい」との問いかけに、手をあげて答える児童たちは、だんだん緊張感も取れ、おじいちゃんやおばあちゃんの歳を聞かれる質問では、「ひいおばあちゃんは80歳」「わかんない」などの返事が**元気な声**に変わっていきました。（取材班も緊張が解けたので、「児童」を「子ども」と呼ばさせていただきます）

つぎに、お年寄りのことを理解してもらうために、「人間のライフサイクルと身体的変化」についてお話がありました。特に「子どもを生む力」のお話のところでは、岩手町で生まれた子どもの数が1年間で66人（平成25年度）であることや、将来、お父さんやお母さんになり、子どもを生み育てることの大切さが熱く語られました。

この講座は、少子化対策の場としても生かされています。

つぎに、「認知症ってな〜に」のお話です。

記憶の箱がゆがんでうまく記憶が入らない絵や、箱に入れることのできない玉入れの赤い玉を記憶に見立てて、**認知症のお年寄りは、新しいできごとを記憶として覚えることが苦手**なことがわかりやすく説明されました。



箱に入らない
でこぼれ落ち
てしまった
記憶

つづいて、認知症のお年寄りが物忘れをしてしまったとき、「ぼくたち・わたしたちは、どんなふうに声をかけたり、接したりしたらよいか」について、紙芝居風のイラストを見ながら、みんなで考えて発表してもらいました。



もし、おじいちゃんが、ご飯をたべたのに、そのことを忘れてしまい、「ごはん食べてない！ごはんまだ！？」と言ってきたら、みんなはどうする？

- 子どもたち
- ・大きい声で「さっき食べたでしょ」と言う
 - ・「もうおなか一杯でしょ」と言う
 - ・また食べさせる
 - ・「もう少し待ってて」という

子どもらしい無邪気な返事が返ってくるなかで、その答えの良いところを評価しながら、お話は「相手の気持ちを思いやって、相手のことを傷つけない接し方」に続きます。



「グループで話し合い中」



「やや緊張の発表」

みんなも、「よし、今から宿題がんばるぞお！」って思っているときに、お母さんに「宿題はしたの!？」なあって、頭ごなしにしかられたら、つい、カーッとなることがあるよね…そんなとき、ほんとうはどんなふうに声をかけてもらえたらカーッとならなかったのって思う？

おじいちゃんは、認知症という病気のせいで「自分がごはんを食べたこと」を忘れてしまっています。だから、「ごはん食べてない。ごはんまだ？」というのは自分の**正直な気持ち**なのに、「さっき食べたでしょ」なんて言われたら、「カーッ!」となってしまうよね。だから、そんなときは、おじいちゃんの気持ちを「**安心させてあげる**」「**上手に変えてあげる**」ようにしてあげてください。

そのためには、まず、相手の気持ちをわかってあげる、**相手の立場で考えることが大切である**ということがわかり、子どもたちの目の輝きが増したような気がしました。

また、これからの認知症サポーターとしての役目として身近にいるお年寄りの様子がいつもと違うことに気づいたときは、お父さんやお母さんに教えてあげてほしいこと、家に帰ったら、今日、配られたパンフレット「**認知症ってなァーに?** (保護者用)」を見せて、認知症のことを家族にも教えてあげてほしいことが子どもたちに伝えられました。

子どもたちを通して、よりたくさんの人たちが認知症のことを理解してくれるようになればいいですね。

最後に、担任の佐藤先生から、授業のまとめとして、今日学んだことを、どのように受け止め、これからどのようにしていけばよいかお話がありました。



子どもたちからの事後アンケート

—認知症の人にどのように接したらよいとおもいますか？

- やさしく怒らずゆっくり教えればよいと思う。
- 驚かせないで接する。急がせないで接する。自尊心を傷つけないで接する。
- 何回聞かれても、1回目に聞かれたように答える。
- 相手のペースや気持ちを考える。

—この講座で感じたことはどんなことですか？

- 認知症になった人にはゆっくりわかるように話したいです。
- ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんが大変だなと思ったら大人に相談します。
- おじいちゃんやおばあちゃんの生活をしっかり見て、変化に気づけるようにしたい。

インタビュー



川口小学校の「孫世代のための認知症講座」への取組について、川村副校長さんにインタビューしました。子どもたちへの温かい眼差しと期待が膨らむお話を聞くことができました。



——川口小学校の子どもたちの家庭環境はどんな様子ですか？
また、どんな特徴がありますか？

まず、全校児童の男女比が 106 対 68 で男子が多いです。

岩手町は、若年層の男女比を見ると、男性の数が若干上回っていますが、総人口の男女比でみると、女性のほうが長寿の方が多いため、女性が多くなっています。

次に、家族構成ですが、本校では、8割の児童が3世代以上の家族と同居しています。（平成 22 年の国民生活基礎調査によれば、児童を含む3世代以上の同居世帯は、全国平均では2割から3割）

3世代以上の同居生活では、子どもの心の中に高齢者に対する理解やいたわり、思いやりといったものが自然に育ちやすい環境であるといわれます。（世代間同居の境界性のあいまいさからくる、嫁姑の育児に対する見解の相違が生じる場合もありますが…）

総体的にみて、祖父母と同居している子や、近くに祖父母がいる子は、やさしく思いやりがある子が多いように感じます。

——「孫世代のための認知症講座」を優先して学習に取り込んでいらっしゃる理由をお聞かせください。

4年生を対象に「孫世代のための認知症講座」を総合的な学習の時間で実施しています。学校の教育課程のカリキュラムが目白押しの中でセレクトも大変ですが、児童が興味を示すこの講座を総合授業の中に取り入れています。

この授業のねらいは、「認知症とは、歳をとるということはこういうことなんだ」と子どもたちに理解してもらいたいこと。認知症に限らず、高齢者になるメカニズムが理解できる年齢の中学年から高学年を対象としました。

まずは、自宅にいる身近な高齢者への思いやりが培われ、いろんな人が理解でき、人に優しくできる人に育ってほしいと願っています。

——学校と地域とのつながりについても教えてください。



子どもたちの安全を守るスクールガード（ボランティア）を募集したところ、老人クラブ川口高砂会の皆さんが中心となって、現在 50 名の方に登録していただいています。巡回指導等を通じて登下校時の通学路の安全確保や、交通安全・防犯意識の高揚のためのパトロール、児童への声かけなどの見守り活動をしていただいています。学校では、掲示板にスクールガードの皆さんの顔写真ポスターを貼り出して、児童に紹介しています。

インタビュー



子どもたちが教室に戻った後、「こぼれおちた記憶のモデル」の赤い玉を片付けながら、岩手町地域包括支援センターの主任保健師、道ノ下さんと畠山さんにインタビューしました。今後の展開が楽しい認知症対策の取組のお話も伺えました。



道ノ下 主任保健師

畠山 主任保健師

—この講座の内容を構成する上で特に工夫した点やねらいを教えてください。

小学生高学年にわかりやすいよう配慮し、講座の内容を組み立てました。

- ・クイズ形式で対話をしながら
- ・パワーポイントを使い視覚に訴える
- ・イメージ作りがしやすい体験型で

記憶が保持できなくなっていく状態をより印象付けるためにモデルを作って表現してみました。この認知症講座では、小学生でも、認知症の人とのかかわりを他人事でなく、自分のこととしてとらえてほしいと思います。次回の講座も寸劇等、いろんな手法を取り入れていきたいと考えています。

—町の認知症サポーター養成に関する取組を教えてください。

一般の方向けの認知症サポーター養成研修とともに、事業所、民生委員、児童委員、保健推進員、介護関係者等を対象とした講演会も開催しています。

昨年の講演会では、予想をはるかに上回る参加をいただくなど、認知症に対する関心が高まっていることを感じました。事業を展開する際は、認知症サポート医や地域の専門医からのアドバイスをいただくなど、関係者の協力のもと、認知症に対する理解者を増やすとともに、見守り支援につなげていきたいと考えています。

—公用車に貼ってあるマグネットポスターについて教えてください

「安心生活あいネット」高齢者見守り事業所は、岩手町が平成 23 年度に策定した「町地域福祉計画」に基づいて実施している活動の一つです。地域による高齢者の見守りのほか、事業所による見守り活動も行われています。地域包括支援センターも高齢者見守り事業所の一つになっています。



取材を終えて・・・

岩手町地域包括支援センターの皆さんからの説明は、手作りの資料を交えた非常にわかりやすいもので、受講した児童の皆さんも40分間、集中力を欠くことなく、熱心に聞いていました。

土地柄、祖父母と同居されている児童の皆さんも多く、認知症を身近なことと捉えており、講座終了後、先生から感想を求められた際には、皆さん元気よく手を挙げてハキハキと答えていました。

先生からは、今日の認知症講座の話を自宅に帰ってからご家族の方に伝えてくださいとの説明がありました。**ご家族の皆さんも、お孫さんを通しておじいちゃん、おばあちゃんに対する思いやりの心がさらに育まれたものと思います。**

孫世代のための認知症講座は、小中学生の皆さんの認知症に対する理解を深めるために取り組んでいますが、今後は、講座の開催にとどまらず、受講された皆さんに、数年後、どれだけ認知症の理解が定着し、それが地域や学校生活の中でどのような活動に繋がっているのかという検証も必要かなと思いました。

(なんでも取材班 「さ」)

今回、特に孫の授業風景を見る思いで校舎に入りました。

体育座りで待っていてくれた、ちょっとやんちゃくんとおしゃまさん達！無条件に可愛いのです。

副校長さんが子どもたちのことを語る言葉にあふれる愛情が垣間見えました。

講座では、講師の子どもたちとのやりとりや、こぼれ落ちてしまう記憶の表し方に感銘し、あっという間の時間が過ぎました。

ちなみに、かつてS担任の先生はM保健師さんのお子さんの担任でもあったそうで、まさに地域のつながりの深さを感じました。**岩手町の「安心生活あいネット」地域の見守りにも期待いたします。**

(なんでも取材班 「つ」)

がんばる地域の情報、大募集！

「ちいきで包む」編集部では、住み慣れた地域で暮らし続けたいお年寄りを、地域ぐるみで支える取組について、情報を募集しています。下記までお寄せください。

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：佐藤・妻田）平成26年10月31日発行

TEL:019-629-5436 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp